

SOSキーホルダーで見守り 窓口は「包括」、主役は地域の専門職

大田区地域包括支援センター入新井 © 東京都大田区

高齢者の見守りに、自由な発想で取り組む地域もあります。東京都大田区では地域の独立型社会福祉士が代表になって「おおた高齢者見守りネットワーク」を結成。包括センターもバックアップしています。(編集部)



商店街の一角に居を構える包括センター「さわやかサポート入新井」

■「車道の真ん中に立っている人がいる」。都内の幹線道路で車を運転していた男性からそんな通報が入った。地域包括支援センターの職員が現場に向かうと、杖に「SOSみま〜もキーホルダー」をつけた女性が男性に付き添われて立っている。男性はこのキーホルダーに書かれていた電話番号に連絡したのだという。女性は認知症があり自宅に帰れなくなっていた。駆けつけた職員はその後女性を自宅まで送り届け、ケアマネジャーと連絡をとり事なきを得た。

■A病院で院内をウロウロしていた女性を、病院職員が警察に通報。保護された警察で「みま〜もキーホルダー」を所持していたことを確認し、地域包括に連絡があった。家族にも連絡がつき、無事自宅に戻ることができた。その女性も認知症があった。

「SOSみま〜もキーホルダー」とは、東京都大田区にある6つの包括センターが窓口となってスタートしている、いわゆる緊急通報用の連絡システムだ。65歳以上の高齢者が対象で、希望者は事前に包括センターに個人情報を登録。外出時には個人番号の入ったキーホルダー（もちろん無料）を携帯する。突然倒れたり救急搬送されたりといった場合に迅速に住所・氏名等の確認が行えるほか、上記のように認知症の人が徘徊などで自宅に帰れなくなったときにも役立つ。2008年8月にスタートして以来、3ヵ月間で登録者は600人以上とうなぎ登り。実際にキーホルダーを見ての通報も4件あったという。うち2つが上記のケースだ。

確かに便利なシステムである。しかしこのシステムがユニークなのは、行政主体ではなく、地域の関係者の手弁当で始まった点だ。

高齢者の憩いの場 地域の老舗百貨店も協力

そもそものきっかけは、2007年の年末に出された「東京都地域ケア体制整備構想」だった。ここでは包括センターの機能強化がとうとうと謳われ、高齢者の見守り・支え合いに関する中核機能を担うことが明示されていた。

「読んでみて、正直これは無理だと思ったんです」と、大田区地域包括支援センター入新井（医療法人財団法人仁会が受託）でセンター長を務める澤登久雄さんは苦笑する。



大田区地域包括支援センター入新井の澤登久雄さん

地域づくりは確かに大切だろう。けれども行政がつくったマニュアル通りのトップダウンで、専門職にとって「新たな仕事」がまた増えた」と感じてしまうような仕組みではうまくいかないのではないか。また孤立する高齢者、本当に見守りが必要な人は自分から手を挙げることは難しい。そうした人にアプローチするためには、地域をよく知る住民主導の形のほうがいいのではないか。そう考えた澤登さんは、すでに面識のあった商店街や民生委員、介護サービス事業所、有料老人ホームに「一緒に何かやりませんか」と声をかけることから始めた。

中でも澤登さんがまず目をつけたのが「ダイシン百貨店」という地域の老舗のデパートだった。昭和の香り漂うレトロな百貨店で、客層の多くが近隣の高齢者。最上階の食堂はまさにお年寄りのコミュニティの場となっている。もともと百貨店の全社員が「認知症サポーター養成講座」を受講するなど、地域に目を向

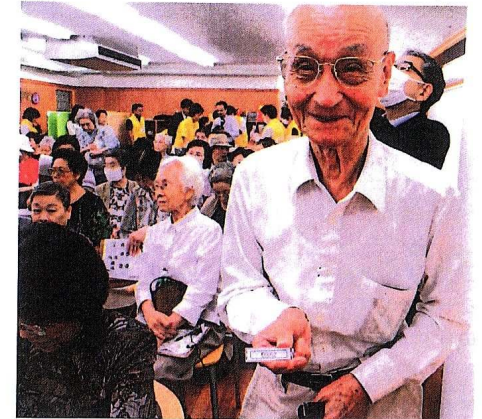
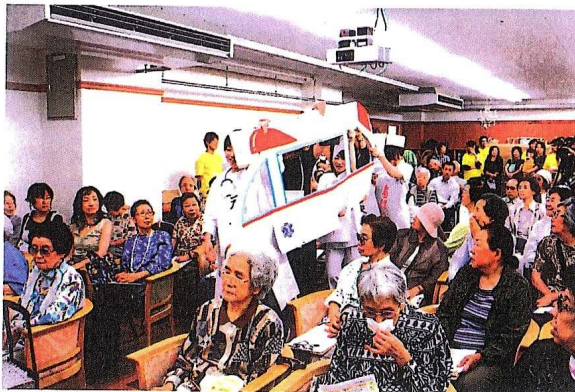
けた取り組みを行っていたこともあり、2つ返事で協力を快諾。催事場を活動の場として無償で貸し出すことを約束してくれた。もともと行政のバックアップがあったわけではない。会場提供というかたちで賛同者を得られたのは大きな前進だった。

澤登さんらはこれを取っかかりに2008年1月、「おおた高齢者見守りネットワーク」を結成。当初からのメンバーだった地域の独立型社会福祉士が代表になり、誰でも参加できる地域づくりセミナーをこの百貨店で毎月開催することにした。内容は「健康はお口から」「介護保険を支える職人たち」など。講師役はもちろん会の関係者だ。

もともとお年寄りが多く訪れる店である。参加者は多いときで100名以上と好評だった。しかも参加者は年齢的には見守られる立場であっても、実際はこうして自分で買い物に出向く元気を持ち合わせている。住民にとっては「地域にはこんな専門職がいるのね」という安心感が、また専門職にとっては「住民の生の声や実状を知る」という、お互いよい距離感をもてる関係作りの場となった。

病院のMSWらが みま〜もシステムを発案

実は先に紹介した「みま〜もキーホルダー」もこの地域づくりセミナーから生まれたプロジェクトだ。それは、地域の4つの病院の医療ソーシャルワーカー（MSW）らが担当した回でのことだった。「突然救急搬送されても身分を証明するものが何もない」「身元を特定するために荷物を隅々まで探さなければならない」と、まさに見守りシステムの必要を感じている最たる人たちがMSWだった。そこでセミナーでは



手にもつのが、SOSみま〜もキーホルダー。傘や杖、ショッピングカートなどにつけるお年寄りが多いという

「医療の現場で働く立場から、どんなことを準備しておいてほしいか？」を劇という形で高齢者に投げかけることに。そして劇の終了後、地域と医療機関をつなぐために「みま〜もキーホルダー」というアイデアがあることを提案したところ、参加者から大きな拍手が起こった。スタッフと参加者の一体感。取り組みが始まって1年半、確かな形で何か動き出した瞬間だった。

澤登さんは「包括センターの一人相撲では地域づくりは難しい。それよりも同じ目的をもつ仲間を見つけ、共有していく作業、その過程こそが重要。そして地域に求められているという誇りと自信が、専門職として働くときの財産になるはず」と話す。

みま〜もシステムの登録は包括センターが窓口となっている。登録は原則、本人か家族に足を運んでもらって行くかたちだ。包括センターの場所を知ってもらいたいし、顔もあわせておきたいからだ。友人を連れてきたらといって複数人で訪れる高齢者や、民生委員に紹介されてといって訪ねる人も少なくない。この取り組み、来年度は大田区からの助成を受けNPO団体として区内全域に広げていく予定だ。これまで区内6つの地域包括がかかわっていたが、これを機に計20ヵ所のセンターがかかわることになる。地域づくりの形はいろいろあっていい、そして形よりも中身をどうつくるかが大事だと生き生きと語る澤登さんの表情が印象的だった。

ある日のセミナー風景。MSWが救急車に扮して参加者の間を練り歩く。セミナーの様子は、澤登さんがブログで発信（<http://noborisawa.blog121.fc2.com/>）。関係者もレポートを楽しみにしている